

《資料・情報》

狩谷掖斎自筆奥書『倭名類聚抄』京本「又一本」

— 狩谷家旧蔵国立国会図書館現蔵「和名類聚抄」(WA 18-14) —

佐々木 勇

〇、本稿の目的

狩谷望之(一七七五—一八三五。以下、掖斎の号で呼ぶ)は、『倭名類聚抄』諸本を借用し、『倭名類聚抄』(『倭名類聚抄箋注』)編纂の対校本文として手元に置くために書写した。

本稿では、『倭名類聚抄』京本「又一本」として、国立国会図書館蔵『和名類聚抄』(WA 18-14)を活用すべきことを述べる。

一、掖斎が書写させた『倭名類聚抄』京本「又一本」

掖斎は、『倭名類聚抄箋注』の「新校正倭名類聚抄所據諸本」^{注1}に、「京本」と「又一本」とについて、左のごとく記している(内は割書。割書内の改行位置を示すことは省略した。以下同)。

京本 (指紳某公所蔵、今所據本即此、而譌脱亦所不免、今從諸本是者改正、每卷附校譌、以存原字、)

又一本 (相傳舊爲難波宗建卿藏本、「誤字與某公本多同」ヲ墨抹)、釘爲三冊、今分在二家、其上一冊、爲錦

所山田翁藏本、中下二冊、爲御醫「典葉」ヲ墨抹、福井崇蘭君藏本、今云山田本福井本以別之。

これは、左の意に解される。「京本」は、「指紳某公」所蔵本である。この本を、この『倭名類聚抄』(『倭名類聚抄箋注』)の所據本とする。しかし、「京本」もまた、譌脱は免れない。今、諸本の正しい本文に従って改正し、巻毎に校譌を付して、「京本」の原字を残す。

「又一本」は、かつて、難波宗建卿(一六九七—一七八八)蔵本として相伝されていた「誤字は某公本(京本)と多く同じ」ヲ墨抹。全三冊の装丁である。今は、二家に分蔵されている。上一冊は山田以文(一七六二—一八三五)蔵本であり、中下二冊は御醫の福井榕亭(一七五三—一八四四)蔵本である。今、山田本・福井本と呼び、それぞれを区別する。掖斎が「所據本」とした「京本」は、現在、所在不明である。

そのため、『倭名類聚抄』および『倭名類聚抄箋注』の研究では、「又一本」とその転写本とを、「京本」の代わりに用いている(京

本」と「又一本」との関係については、後述する。

「又一本」中冊（福井本）の原本は、東京大学文学部国語研究室に所蔵されている。^{注2}

一方、「又一本」の上冊（山田本）・下冊（福井本）原本は、現時点では所在が知られていない。

現在は、「又一本」の上冊・下冊として、それを再転写した尊^{注3}

経閣文庫蔵「前田本」・東京大学文学部国語研究室蔵「小島本」（巻第七〜巻第十の下冊のみ残存）などが使用されている。

二、国立国会図書館蔵『和名類聚抄』（WA 18-14）

「又一本」上冊・下冊に代用されている「前田本」には、左の奥書が有る（〵は改行を示す。以下同）。

〔巻上〕 右一冊借吉田鈴鹿河内守蔵本令備書生影寫手自一校／文

政四年七月 狩谷望之識于京師客舎

〔巻中〕 （ナシ）

〔巻下〕 以上二冊借福井丹波守蔵本影鈔手自讎對／是本舊難波宗

建卿所蔵今分在二家／文政辛巳年七月 狩谷望之識于京師客館

右は、掖斎自筆の奥書を透写したものである。

その原本である文政四年（一八二二）書写・掖斎自筆奥書の「又一本」が、現存する。国立国会図書館蔵『和名類聚抄』（WA 18-14）上中下三冊、狩谷家旧蔵本である。^{注4}

この本は、「国立国会図書館デジタルコレクション」で全頁カラー画像が公開されている。^{注5} 以下、国会図書館本と呼ぶ。

この国会図書館本は、『国書総目録』（一九六三—一九七六年、岩波書店）・国文学研究資料館『古典籍総合目録』（一九九〇年、岩波書店）および日本古典籍総合目録データベース（国文学研究資料館）に掲載されていない。その理由は、本稿の筆者には不明である。『倭名類聚抄』の研究にこの国会図書館本が活用された例も、寡聞にして知らない。

国会図書館本には、各冊第一丁表に「帝国図書館蔵」「帝国（昭和一〇・六・十一・寄贈・）」の朱丸印が押印される以外、蔵書印は無い。昭和十年（一九三五）まで、掖斎旧蔵書として狩谷家に保管されていたものと思われる。

東京大学蔵「又一本」中冊原本とこの国会図書館本および前田本とは、三者ほぼ同寸、同一の書式・行取りである。

三、国会図書館本と前田本との比較

最初に、国会図書館本と、現在の研究で利用されている前田本とを比較する。まず、「又一本」の原本が存し、複製本も刊行されている中冊（巻第四〜第六）について、両者の異同を記す。

三・一 声点の位置

被注語 国会図書館本 前田本 所在（丁・表裏・行数）

多介 上上 平上 一五才10

須、 上上 上平 五三ウ2

両例とも、東京大学蔵本と一致するのは、国会図書館本である

〔須、〕の「上上」は、四・四の②を参照。

三・二 声点加点的有無

国会図書館本にのみ声点がある例を左に記す（前田本で声点無加点の字に傍線を引く。虫損等で前田本の声点が見えない場合を含む）。

字倍乃伎沼（二ウ7）・无豆岐（四ウ6）・久佐毛知比（一二オ2）・无岐加太（二二オ10）・阿布利毛乃（二六オ3）・太知波奈乃加波（一八ウ5）・空古（二八オ1）・天太（三五ウ9）・久豆和都良（四〇ウ5）・度利古（四二ウ10）・天平乃（四六ウ6）・須美奈波（四七オ9）・逆賀波（四七ウ10）・方馨（五〇ウ1）・象乃古度（五〇ウ7）・佐之久之（五五ウ8）・宇流之奴利乃夜岐之留乃都奉（五七オ2）・太介乃久之（五七オ5）・加良无之（六二オ1）
東京大学蔵本の声点は、右の全例が国会図書館本と同一である。

三・三 標目の振り仮名

標目字	国会図書館本	前田本	所在（丁・表裏・行数）
冠	カウフリ	カフリ	一オ10
銚子	サシナヘ	サシサヘ	一九オ4
燈心	トウシミ	（ナシ）	二五オ1
囀	テ、レ	（ナシ）	四二ウ9
罽	サヒツエ	サヒツエ	四四ウ2
灰汁	アク	（ナシ）	六一オ3

本項目でも、国会図書館本は、東京大学蔵本と全て一致する。

三・四 注の順を示す朱線

国会図書館本には、「又一本」の割注における書写の乱れを正す朱訂線が引かれている。この朱訂線と文が繋がる順を示した「一二三四」の朱字も、本文漢字を訂正した椛斎朱筆の墨色・筆蹟と同じように見られる。

この朱訂線は前田本にも存し、小島本は該当箇所を空白にする。これによって、前田本・小島本が朱訂線の存する椛斎本を写したことが推定されていた。^{注6}

国会図書館本には、「筥篋」（二七ウ10）の注文末割注「筥篋俗云／＼音空^{（モ）}古^{（上）}」（二八オ1）の順序を修正し、「二音俗云空^{（モ）}古^{（上）}」と読むべきことを指示する朱線が存する。

しかし、前田本の当該箇所には、この朱線が無い。

三・五 本文の欠落

東京大学蔵本・国会図書館本の標目「捨灰」（六一オ1）とその注文「作之」（同上）の「之」とが、前田本には見えない。

前田本は、全体に虫損・破損が激しい。錯簡も存する。

以上、国会図書館本と前田本との相違点三・一―三・五は、すべて、国会図書館本が東京大学蔵本のままに写し、前田本が東京大学蔵本と異なる例である。

三・六 上冊・下冊における異同

「又一本」原本が見つかっていない上冊・下冊について国会図

書館本と前田本とを比較しても、結果は同じである。^{注7}

紙幅の都合で、声点の異同例のみ記す。

標目字・語 国会図書館本 前田本 所在

父・知、 平上 平下 上一八才10

鳥賊黒：以加乃久呂美 上上上平平 上平上平平 下三二ウ10

つぎに、国会図書館本にのみ声点が加点される例を挙げる（前

田本で声点無加点の字に傍線を引く）。

宇太加太（上三ウー）・无之加女波（上三五ウフ）・都以加岐（上

五三才5）・比都米（下一九ウ2）・古乃之侶（下二四才10）・比流

（下三六才9）・比度豆比流（下四六才8）・於保祢（下五〇才

5）・波久倍良（下五二才4）・恵米利（下五七ウ1）・毛と乃夜迹

（下五七ウ3）・布知波加麻（下五八才8）・衣比須久須利（〇上上

上上平。五九ウ9）・阿夜女太无（下六三ウ8）・於保と曾美（下

六四才9）・加良須牟岐（下六五ウ2）・佐と波曾良之（下六五ウ

7）・保と乃可波（下七四ウ1）・衣（下七四ウ7）・奈加古可知

（下七九ウ6）

声点に限らず、両本の異同例は、国会図書館本が「松井本」「伊

勢本」など「京本類」の本文や振り仮名・『類聚名義抄』等と一

致し、前田本がそれらと異なる例ばかりである。

四、「又一本」原本と国会図書館本との比較

国会図書館本は、東京大学現蔵「又一本」原本の書式を留める臨模本である。ただし、字形まで似せてはいない。

東京大学蔵「又一本」中冊原本と国会図書館本中冊とを比較すると、次の異同が見られる。

四・一 本文の朱訂

標目 東京大学蔵本 国会図書館本 所在

①桂 婦人頂上 婦人頂「右傍朱訂」上 三ウ2

中冊全体で、国会図書館本本文の誤写は、右一例のみである。

右傍の朱筆訂正は、奥書に記す「手自一技」「手自讎對」に当

たる校齋による校合である。この朱筆による本文訂正は、上冊・

下冊にも見られる。

四・二 本文の異同

標目 東京大学蔵本 国会図書館本 所在

②糸鞋 伊上乃久都 伊止乃久都 七ウ6

③醜 之と比之保 之と比之保 一六ウ7

国会図書館本は、東京大学蔵本の誤写を正して書写している。

四・三 標目字振り仮名の異同

標目 東京大学蔵本 国会図書館本 所在

④糸鞋 シカイ カイ 七ウ6

⑤籠 コ (ナシ) 二三才5

⑥庭療 マハヒ 二ハヒ 二四才8

⑦書案 フミツクエ フツクエ 三四才3

⑧ 瑣 ミ、フタキ ミ、フクキ 五三オ2

④⑤は誤脱、⑧は字形類似による誤写であろう。

⑥は、東京大学蔵本の誤写を正した例である。

⑦は、別語形を示したものかもしれない。

四・四 声点の異同

〔異なる声点加點〕

被注字・語 東京大学蔵本 国会図書館本 所在

⑨ 大口袴・於保久知乃八賀万

平平上上上平平 平平平上上平 四オ6

⑩ 松・毛乃之太乃太不佐岐

平○上平平上上上上 平○上平平上上上 四ウ4

⑪ 煎汁・加豆乎以呂利

上上上上上上上 上上上上上上上 一七ウ1

⑫ 鏡・加奈万利

上上上上上 上上上上上 一九ウ5

⑬ 錐・岐利

平上 平上 四七ウ6

⑭ 韋・乎之賀波

上上上上上 上上上上上 四八ウ3

⑮ 鍾子・子夜須利

上上上上上 上上上上上 四九ウ3

⑯ 食單・須古毛

平上平 平上平 五七ウ1

⑰ 牛頭香・五豆

去上 去上 五八ウ4

⑱ 梔子・久知奈之

上上上上上 上上上上上 六〇オ5

⑲ 鴨頭草・都岐久佐

平平上上平 平平上上平 六〇ウ6

⑳ 笙・都保

○上 上上 五一ウ4

㉑ 鈴・須、

〔須〕上平〔こ〕上上 五三ウ2

⑳ 黄業・王佐以 平平○ 平平平 一五オ7

㉑ 泛子・宇介 上○ 上上 四四オ2

㉒ 麻苧・加良无之 平平平○ 平平平 六二オ1

国会図書館本は、声点が連続する場合、直上字と同じ位置に声点を加點する例が有る(⑨)〔⑬〕〔⑱〕。

⑰「牛頭」は、伊勢十卷本・高松宮本・林羅山書入本とも、「去上」の声点加點であるため、国会図書館本の誤写である。

なお、東京大学蔵本には、文字から離れた声点がしばしば見られる。国会図書館本は、これを通常の声点加點位置に戻して移点している。その著しい例が、⑳・㉑である。㉒は、「都」に加點すべき上声点を、東京大学蔵本が直上の「云」の左下に加點しているものを、国会図書館本が「都〔上〕保〔上〕」に正した例である。

㉑は、東京大学蔵本が「須〔上〕〔平〕」と加點し、その下の「、」を無加點としているものを、国会図書館本が「須〔上〕、〔上〕」に訂正した例である。「鈴」は、伊勢十卷本『倭名類聚抄』および観智院本『類聚名義抄』・蓮成院本『類聚名義抄』でも、「上上」の声点加點例を持つ。

㉒⑳㉑は、国会図書館本の加點が、伊勢十卷本・松井本の声点と一致する。東京大学蔵本が落とした声点を、国会図書館本が補正したものと思われる。^注

〔声点加點の落ち〕

東京大学蔵本の左十一語に存する声点が、国会図書館本では全音節に加點されていない。見落としたものと考えられる。

賀字布利(一才10)・久須利(九才8)・古与之毛乃(二六才7)・阿布良(二四ウ8)・波太(二八ウ7)・字須(三九ウ9)・与勢波之良(四一才5)・古天(四六才4)・古介良(四六才10)・久美(五三才9)・万由(六二才7)

四・五 部・類見出し上朱点の異同

部・類見出し上の朱点を、国会図書館本が落とした例が有る。

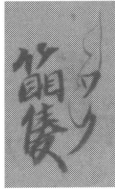
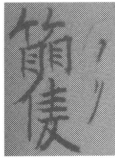
飯餅類(一一才5)・魚鳥類(一五ウ3)・金器五十九(一八ウ8)・木器六十一(二〇ウ3)・弓剣具七十四(三七ウ1)

四・六 虫損箇所の写真

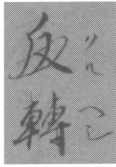
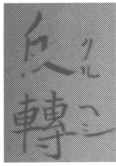
東京大学蔵本の虫損を国会図書館本が写した例を、複製本と公開画像とから、左に引用する。

東京大学蔵本

国会図書館本



(中冊六二ウ8)



(中冊六二ウ10)

上冊・下冊にも、「又一本」の虫損を国会図書館本が写した箇

所が存する。^{注10}

以上、国会図書館本は、転写に伴う誤写・誤脱が存するものの、「又一本」を正確に写そうとしている。しかも、「又一本」の明らかな誤りを正している。

五、国会図書館本と前田本との関係

前々節に記した国会図書館本と前田本との異同は、国会図書館本が東京大学蔵本のままに写し、前田本が東京大学蔵本と異なる例のみであった。

また、前節で見た国会図書館本の実態を、前田本は誤写・誤脱を含め、そのすべてを引き継ぐ。^{注11}

以上の比較結果は、前田本が国会図書館本の転写本であることを示している。

前田本は、国会図書館本の字形までも写した透写本(影写本)である。三・二、三・四、三・六で挙げたとおり、前田本に朱筆を部分的に加点しない例が有るのは、下に置いた親本(国会図書館本)の朱点の一部を見落とすことが有ったためであろう。

六、「京本」と「又一本」との関係

椽斎は、「京本」「又一本」を、「新校正倭名類聚抄所據諸本」の十巻本に「尾張本」「伊勢本」「昌平本」「曲直瀬本」「下総本」と同列に立てた。

この「京本」と「又一本」との本文上の差違について、宮澤俊雅（一九八五）は、次のように述べた。^{注12}

箋注の校語や校語によって見ても、京本と山田本・福井本の本文上の差違は明瞭ではない。憶測を逞しくすれば、山田本・福井本が京本そのものであって、それが搢紳某公の手から離れていることを臆暖化するために又一本を仮設したのではあるまいか。

一方、不破浩子（一九九六）^{注13}は、「舊本と山田本が異なる文を持つと見なさざるを得ない」例として、a↔dの四例を挙げた。論考中に不破自身が述べるとおり、a↔c例は「舊本の文としていたものを山田本の文とするもの」であり、両本が別本であることの根拠にならないため、ここでの挙例を省略する。

d例（巻二「黒子」の「漢書注云」についての校語の注）を不破論文が参照した椋斎自筆三校本『倭名類聚抄箋注』（内閣文庫・特068-004）から、左に引用する。

舊缺書注二字「上欄」「山田本同」、昌平本作漢語注云誤、那波本作漢書云、未是、今從曲直瀬本改、

不破論文は、上欄「山田本同」を「山田本」と読み、昌平本に続けた（舊缺書注二字。「山田本」昌平本作漢語注云、誤）。そのため、「舊本」は「漢云」に、「山田本」は「漢語注云」に作るという形で、舊本と山田本が異なることを示している。」と解釈した。

しかし、椋斎自筆『倭名類聚抄箋注』本文は右に示した通り、舊本と山田本とが同一であると述べる。

山田本（又一本）を写した国会図書館本の本文も、「漢」云（上冊四〇ウ9）、と二字分空白である。

また、宮澤俊雅『倭名類聚抄諸本の研究』483頁下段は、「又一本は京本そのものか、複製（透写）なのである。」とし、485頁上段では、「箋注の校異および校訛の記述の中には確実に京本と又一本で異なっている箇所と成し得るのは隻手にも足りないのである。」とする。

舊本と又一本とがそれぞれに存在していたとしても、両本の相違は、透写における誤写の範囲内であった、と考えられる。^{注14}

七、むすび

本稿では、狩谷家旧蔵国立国会図書館現蔵『和名類聚抄』（WA 18-14）三冊が、「又一本」原本の転写本であり、従来の研究で活用されてきた前田本の親本であることを主張した。

椋斎は、この国会図書館本を手元に置き、『倭名類聚抄』諸本と対校した。

「又一本」原本の上冊・下冊が所在不明の現在、中冊は国会図書館本を参照し^{注15}つつ東京大学蔵本を、上冊・下冊は国会図書館本を使用しなければならない。

注1 内閣文庫蔵『倭名類聚抄箋注』（特060-0026）椋斎自筆本に依る。『箋注倭名類聚抄』（一八八三年、印刷局）では、「参訂諸本目録」とされる。

注2 東京大学国語研究室蔵黒川文庫鈴鹿本『倭名類聚抄』中冊(国語・二七・二七二)。宮澤俊雅「倭名類聚抄京本解題」(『倭名類聚抄京本・世俗字類抄二卷本』(東京大学国語研究室資料叢書第十三巻)一九八五年、汲古書院。後、「倭名類聚抄諸本の研究」(二〇一〇年四月、勉誠出版)所収、参照。

注3 前田本は、狩谷家旧蔵本が虫害を被った後である。川瀬一馬「古辞書の研究」(一九五五年、大日本雄辨會講談社)は、前田本について、「前田家にて明治年間に椋斎本を臨模せし尊経閣文庫本」(九三頁)とする。前田本の最初の複製を収めた馬淵和夫「和名類聚抄古写本声点本文および索引」(一九七三年、風間書房)、全冊を影印した同「古写本和名類聚抄集成 第二部 十巻本系古写本の影印対照」(二〇〇八年、勉誠出版)でも、前田本を「明治時代写」とした。小島本が「再転写」であることは、注2宮澤解題五一〇頁に指摘されている。

注4 国会図書館本の下冊裏表紙見返には、狩谷三市氏自筆書人が有る。
椋斎翁百年忌二際シノ爲寄贈候也ノ 昭和十年六月八日ノ 曾孫ノ 狩谷三市ノ帝國図書館ノ 御中

また、各冊の表紙に続く遊紙見返下に「(空白)寄贈本」の緑長方印が捺され、印の空白部に「狩谷三市氏」と墨書されている。注5 国立国会図書館デジタルコレクション担当員のご指示に依れば、画像公開日は、二〇二二年四月九日である。この本の存在は、『新編帝国図書館和古書目録』(一九八五年、東京堂出版)に記載されている。また、梅谷文夫『狩谷椋斎』(人物叢書(新装版)、一九九四年、吉川弘文館)の220頁に、椋斎自筆奥書の内容が紹介されている(この本に国会図書館本の言及があることは、

本誌査読担当者より情報を得た。

注6 注2宮澤解題、五一〇頁。

注7 上冊・下冊についても前田本との比較結果を記すべきであることは、査読担当者より指摘を受けた。

注8 注2宮澤著書、参照。

注9 あるいは、⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿に過ぎない、と見ることもできる。

注10 上冊五九才9割注最下字、下冊三ウ7標目字・六六ウ9「古毛」等。国会図書館本には、声点加点点位置に当たる部分の底本虫損を、朱筆で模った箇所(下冊七六ウ10「和太と比」など)も有る。

注11 たとえば、国会図書館本が全音節の声点を落とした十一語(四・四「声点加点点の落ち」)は、前田本でも全例無加点点である。

注12 注2宮澤解題、五一〇頁。

注13 「校謄」及び「異體字辨」の定位」(長崎大学教養部紀要(人文・自然科学篇合併号)第37巻第1号、一九九六年七月)二五頁。

注14 「新校正倭名類聚抄所據諸本」で「又一本」について、「誤字與某本多同」と椋斎がいったん記した通りである。「又一本」という呼称も、まったくの別本ではないことを暗示している。

注15 国会図書館本は保存状態が良かったため、東京大学蔵中冊原本における国会図書館本転写後の虫損等を補うことができる。

—— 広島大学大学院教授 ——

(二〇二〇年五月二六日 第一稿受理)
(二〇二〇年九月九日 最終稿受理)